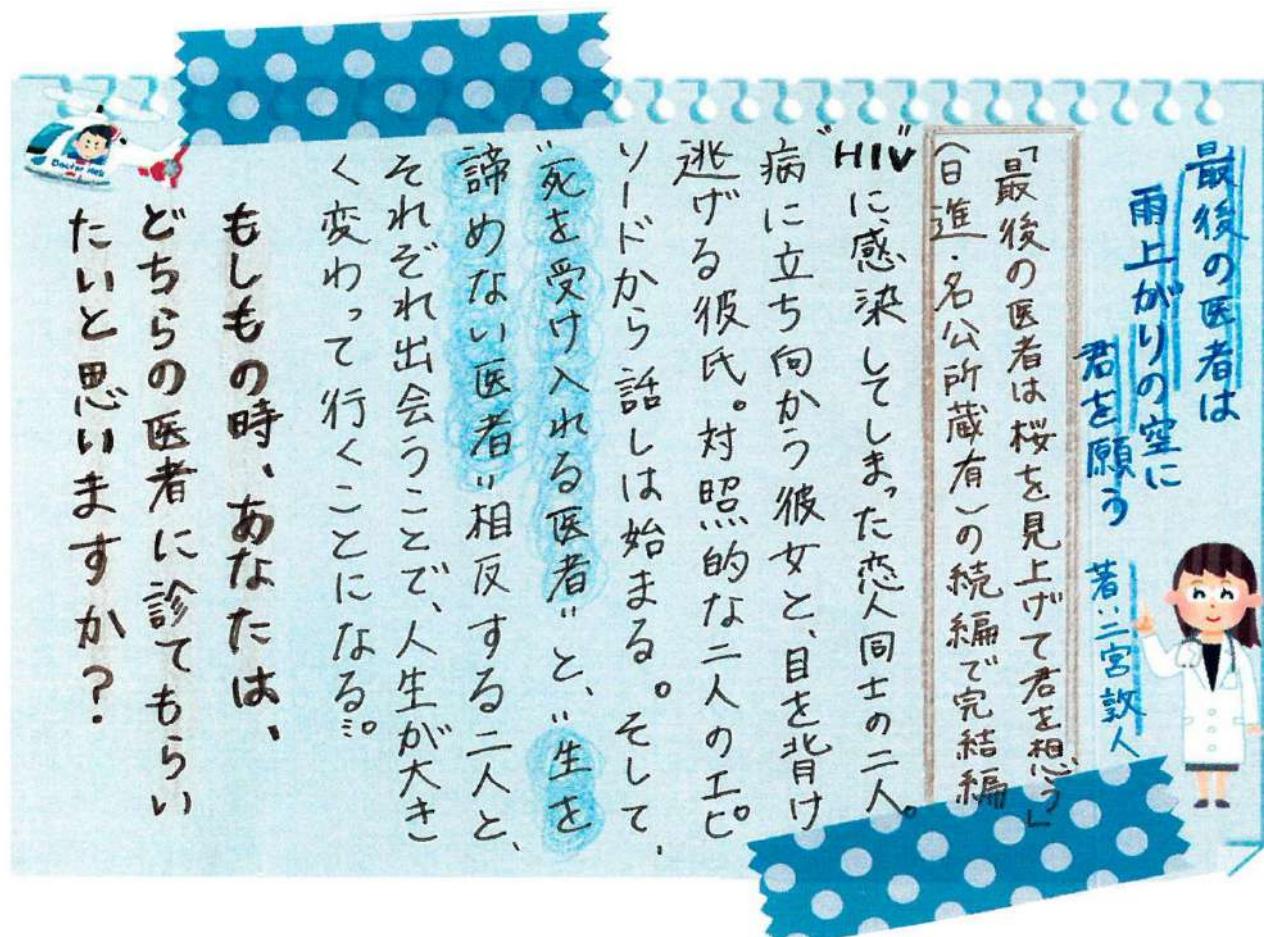




	書名	著者名	請求記号
1	最後の医者は雨上がりの空に君を願う 上・下	二宮敦人著	913.6/Ni/1 ～2
2	トップナイフ	林宏司著	913.6/Ha
3	崩れる脳を抱きしめて	知念実希人著	913.6/Ch
4	いのちの停車場	南杏子著	913.6/Mi
5	がん消滅の罠:暗殺腫瘍の謎	岩木一麻著	913.6/Iw
6	殺人者の白い檻	長岡弘著	913.6/Na
7	病は気から、死は薬から:薬剤師・毒島花織の名推理	塔山郁著	913.6/To
8	ホット・ゾーン:「エボラ出血熱」制圧に命を懸けた人々	リチャード・プレストン著、高見浩訳	493.8/Pr
9	チーム・バチスタの栄光 上・下	海棠尊著	913.6/617/ 1～2
10	孤独な子ドクター	月村易人著	913.6/Ts
11	希望のステージ	南杏子著	913.6/Mi
12	臨床の砦	夏川草介著	913.6/Na
13	泣くな研修医	中山祐次郎著	913.6/Na
14	歯科女探偵	七尾与史著	913.6/Na
15	アウシュヴィッツの歯科医	ベンジャミン・ジェイコブス著、向井和美訳	936/Ja
16	夜と霧	ヴィクトール・E.フランクル著、霜山徳爾訳	946/Fr



トップナイン

林宏司：著

「トップナイン」…医師の中でも超一流の技術を持つ者にのみ、あたえられる最高の称号。

- ・脳外科医としての腕を磨くため、夫と娘を犠牲にしてきた深山。
- ・世界最高峰の脳外科医で、結婚せず、酒と女性関係に奔放な黒岩。
- ・患者と距離を取り、幼少期のトラウマを抱えるも若くして天才と呼ばれる西群。
- ・幼い頃から頭脳明晰で、トップの道を突き進んできた新人の小机。

優秀な医師として、普通の人として、それぞれの姿、どちらも魅惑的に書かれています。

2020年ドラマ化された「トップナイン」の原作です！

崩れる脳を抱きしめて

広島から横浜の療養型病院へ、研修医としてやって来た主人公の“ウスイ”は、グリオブラストーマ（悪性脳腫瘍）を抱える“ユカリ”と出会う。外の世界に怯えるユカリと、あるトラウマを抱えたウスイ。2人は次第に心を通わせていくか…。

本書で“一番印象的だったのが、ホスピスを兼ねている院内で、「DNR（蘇生処置拒否）」を希望する患者を、ウスイが看取るシーン。とても、考えさせられるものがいる。

終末・緩和医療、家族愛、恋愛、ミステリーなど、様々なテーマが詰まった作品です！

いのちの停車場

東京の救命救急センターからとある事情で金沢に戻った主人公。故郷の地で訪問診療医として働くことになるが…。

訪問診療で会う患者や主人公の父を通して見えてくる問題。家や家族から離れて、病院で最期まで治療を続けることが理想なのか？ 苦しくても痛くても生き長らえることが患者にとって良いことなのか？ たとえその先に回復の見込みがない状態で生き続けることが幸せと言えるのか？ 理想の最期とは一体どこにあるのか？ 終わらない苦しみ、痛み、安樂死。主人公を通して、色々と考えさせられます。





暗殺腫瘍の謎

岩不一麻・著

医師の夏目は友人から持ち込まれた「悪性黒色腫」発症に伴う保険金詐欺情報と、外来患者が患る「無色素性悪性黒色腫」に強い不審を抱く。

同じ頃、他県で発生した医師連続殺人事件の被疑者にやがての恩師の名が挙がり、いろいろと知り……。「やがん」の発生から抑制までを人為的に操ろうとする強い悪意に巻き込まれていく夏目に突きつづられる代替医療の闇。

がん治療＝焦点をあてた小説が描くのは、すでにありえない現実なのかもしれない。



さて事件の真実とは。

殺人者の白い檻

長岡弘樹・著

優秀な脳外科医でありながら医師の仕事に価値を見出さなくはない尾不敦也は救急搬送されて医師に囚人が、六年前に両親を殺害した犯人であることを知る。しかも相手に判決後も貫して無実を訴えていた……。

回復すれば刑が執行されると知りながらリハビリに励む死刑囚は被害者遺族ではなく、主治医として向こう合う敦也は医師としての矜持を取り戻すのか？



病は氣から、死は薬から

塔山郁著

ホテルマン・水尾爽太の身の回りで起こる

トラブルを専門知識と経験を元に解決する

薬剤師2人の活躍を描くミステリ(?)

サプリメントや健康補助食品にまつわる

マルチ商法、罠、死に至る毒にもつさる

草花だけで育てている女の秘密……。読みだす



知識も増えろ、一石二鳥の小説です。



TIE ホット・ソーンZONE

エイズ出血熱、命を懸けた人々

すごい本だ…！ ストレンジャー・シングスやゲーム・オブ・スローンズなどの海外ドラマにハマッたことのある人なら読んでわかるはず。恐ろしくても次のエピソードへのめり込んだドラマのように、構成が見事で、忍び寄る恐ろしいもののカットの挿入に、先の展開に怯え手に汗を握りながら貪欲に読みこなす。エボラに魅せられた"りカード"・フレストンの取材の見物物である。ましてや、先のドラマと違ってこの物語は実話なので、感染症の恐怖（病気そのもの、ちょっとした油断も、周りの影響も）がすっかり日常と混じて今読みひと、臨場感がすさまじいものである。

そして改めて、最前線に立つ者の勇気に、「勇者」とはこの人たちだと感じさせて震ふ。つくられた物語ではなく、この世界を求めて奮闘してヒーローたちの物語。



チーム・バチスタの栄光 上・下

海棠 尊著

舞台は大学病院。心臓移植の代替手術バチスタ手術専門の天才外科チームが「チーム・バチスタ」。手術の成功率は100%だったが、3例連続術中死が起り、内部調査が始まり、徐々に解き明かされていきます。医師である海棠尊のデビュー作で、「このミステリーがすごい！大賞」の第4回大賞作品。映画化もされている。



孤独なドクター 月村昌人著

著者は現役の

消化器外科医。

実体験が生かされてるため、この小説は外科医療の現場の様子やそこを働く人々の心がとてもわかりやすく描かれています。



主人公は三年目の医師。研修医として二年間の初期研修を終え、専門家として理由で外科を選び、「専攻医」として大きな病院に赴任します。初めての現場で奮闘しますが、思うようにはいかず、悩みや孤独を抱えるようになります。そんな主人公の心の動きや周りの失輩、同期、後輩、患者さん、思ひがり屋に伝わってきます。さりげなくおさまれる両親とのやるよりもいにしへ、色々な人が気持ちになれる青春小説。

希望のステージ 雨杏子著



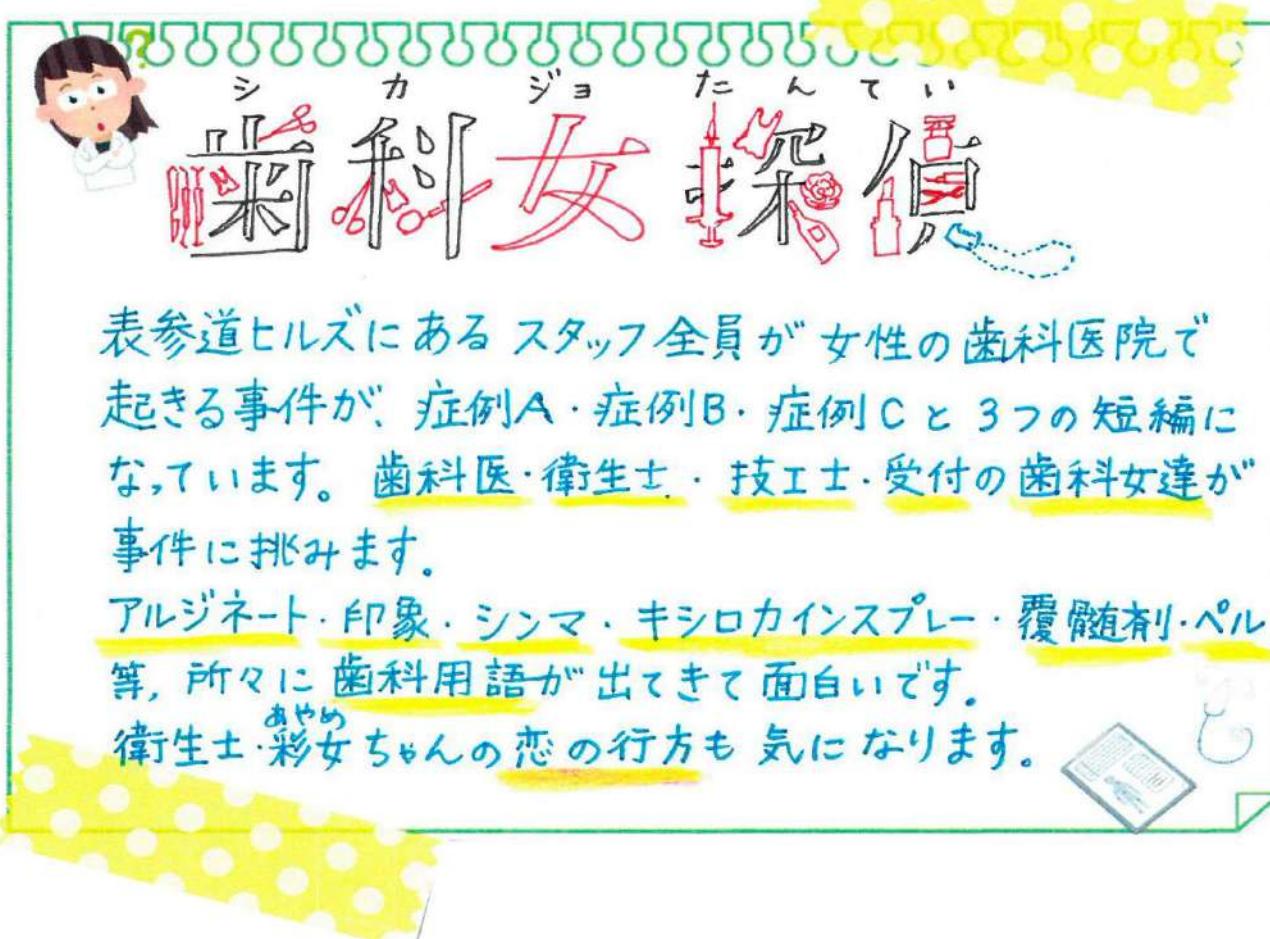
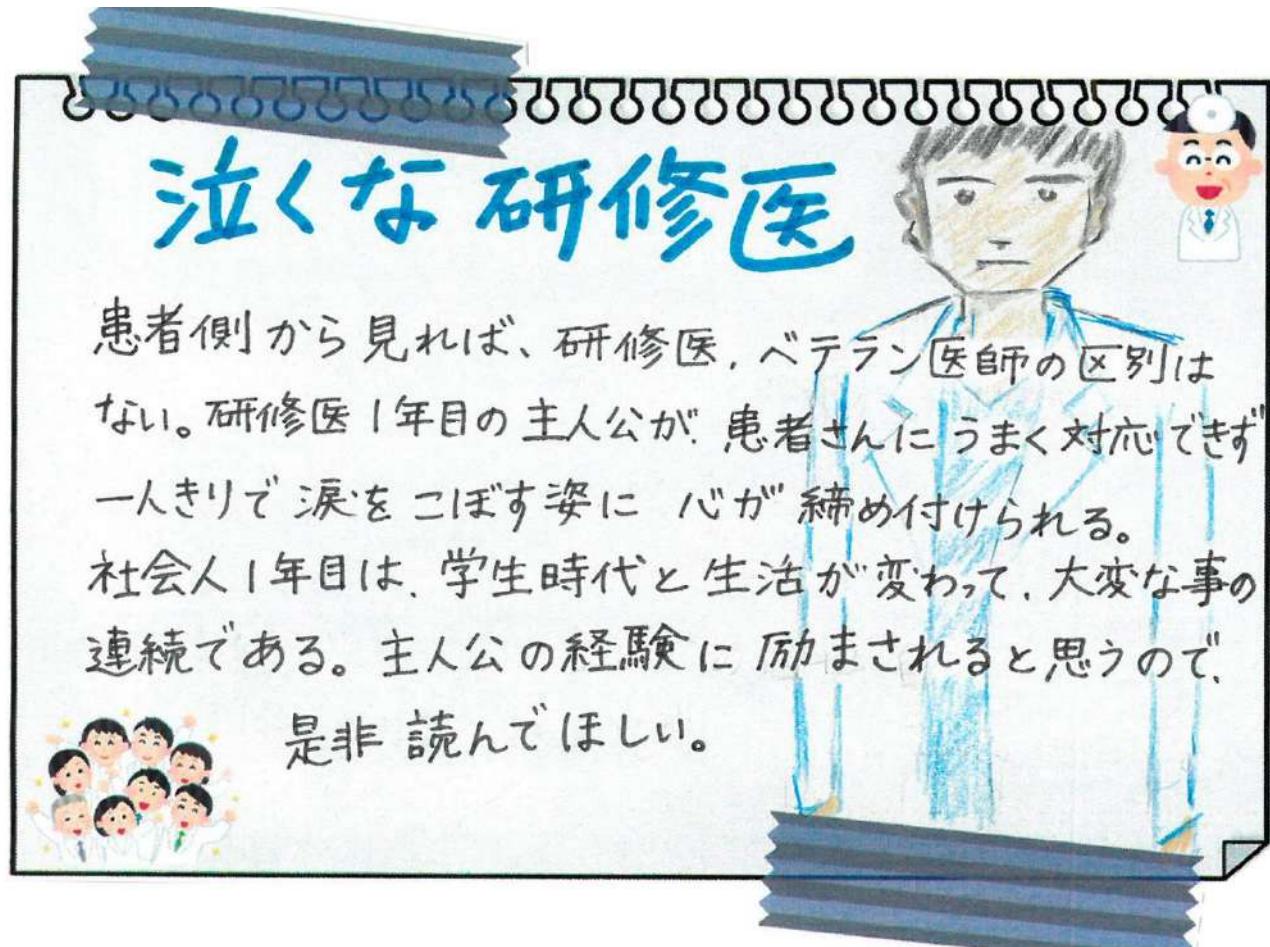

ステージに立つことを目指している人を支える医師の物語を集めている。人は最期をどう迎えるか、高齢化社会が進み、人間の尊厳についても考えさせられる昨今であるが、私は、ある医師と周囲の人間との物語の中に、大きなテーマが隠れていたと思いつながら読んだ。「人生とは」「人が生きていろといふこととは」この本を読んで考えてみるのもいい。

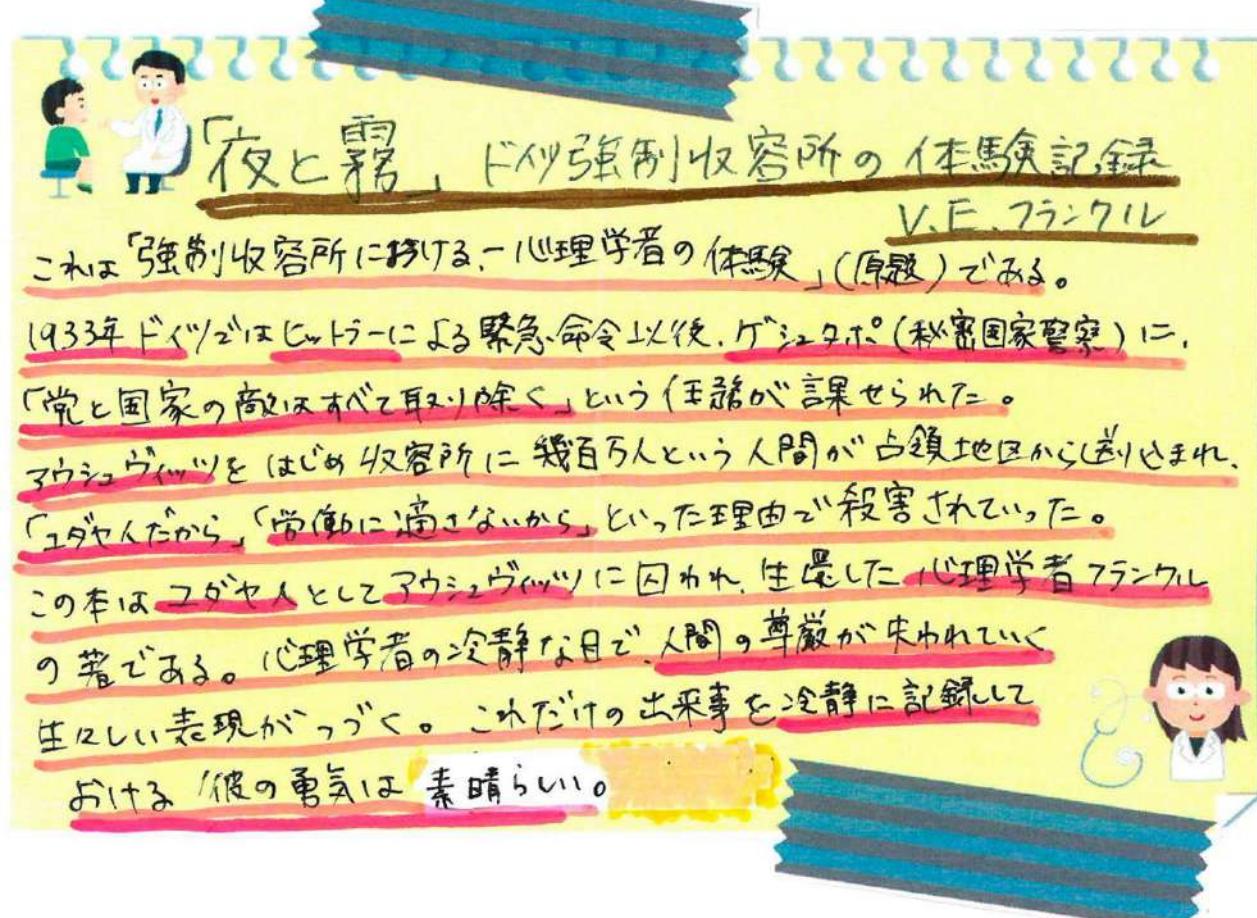
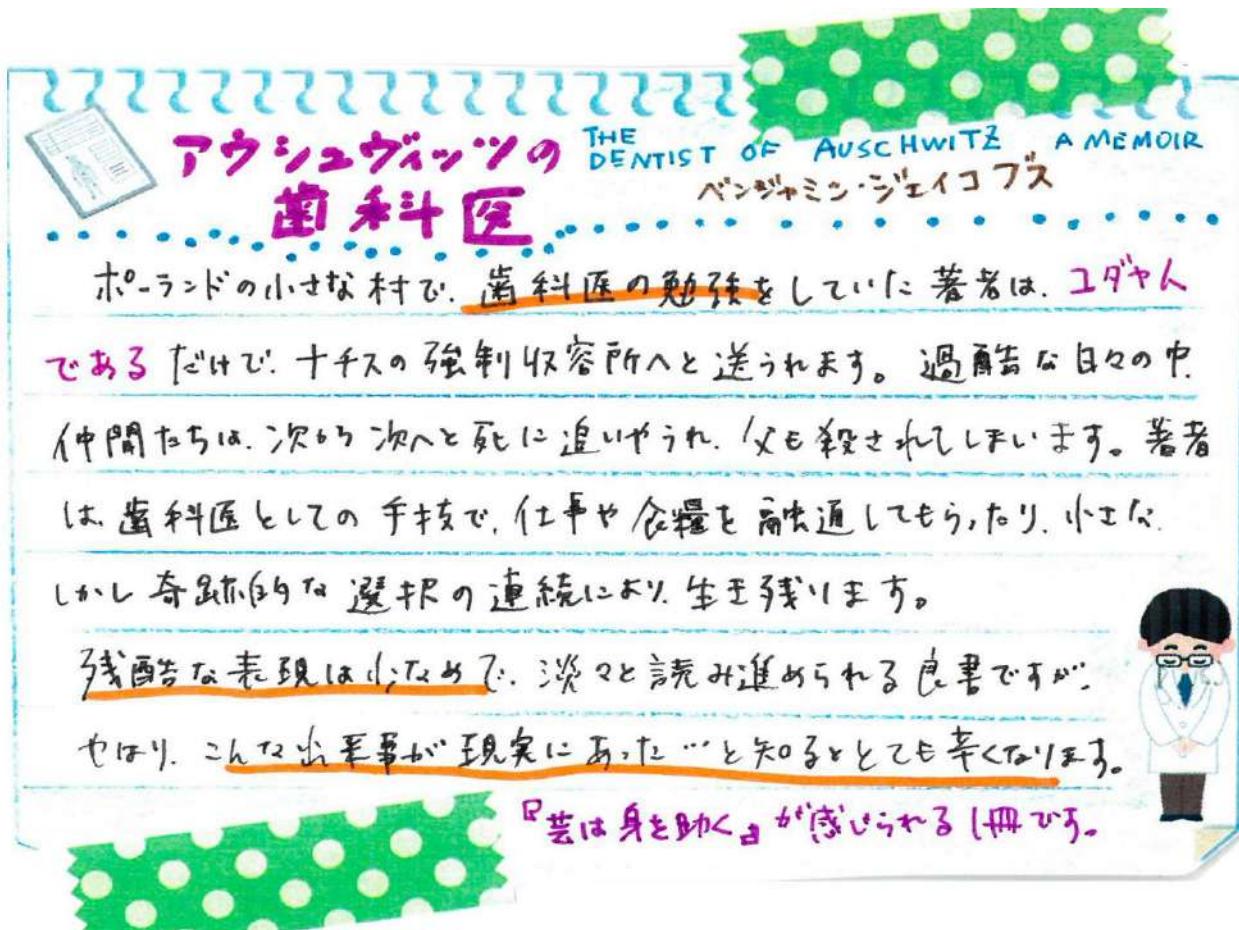
臨床の砦 夏川草介著




この話は、2021年冬、緊急事態宣言が発令された頃の長野県の病院が舞台となっています。インフルエンザですが、医師である著者が新型コロナウィルス患者の対応をしている現場について綴っており、実際の現場に近い話であると想像できます。

医療現場で働く人も人間であり、家族がいます。人を救うために追われながら対応している苦悩が描かれています。私たちはたくさん的人に支えられて日々過ごしているのだと考えさせられます。







MEMO





MEMO





愛知学院大学
歯学・薬学図書館情報センター

コンセプトコーナー 2022年12月～2023年1月
小説で知る医療現場の希望と葛藤

